團扇曾我

文宣王は大野に狩して麒麟を得。韓退之が獲麟の解に曰く。麟は德を以てし形を以てせずともいふ。麟は仁獸にして生けるを喰はず。生草を踏まずともいへり。地道ある君が御狩場や。麒麟を得ずといへども農業を妨げず。民を助けて山田もる火串の光明々として。斐たる君子の一遊一豫。國を辟かす旅竿のオロシ直なる掟。樂しめり。地維時建久四年仲夏下旬。征夷將軍頼朝卿。富士の御狩の當日を待つも程なき短夜や。御發向は寅の一點假屋の木戸も明け方に。御出馬の御觸あり。昵近外様の大小名狩裝束に美を盡くし。勢子の人數は所領の高下面々持の場所に纒を。立てて組子には思ひ〳〵の笠標袖印。扨御鷹は雀鷂雀鷂鶉鳩兄鷹。隼兄鷹朝鮮鷹。逸物の犬唐犬これも數疋ひかれたり。馬鞍皆具の綺羅飾。花と紅葉と武藏野に一度に眺むる如くなり。地爰に信州の住人海野の小太郎行茂。八十ばかりの老入道を御前に引据ゑ。詞只今御假屋へ參勤仕る處に。此の入道弓矢携へ。御假屋の邊を忍んで徘徊仕る體。山賊强盜とも見え申さず。必定平家の餘黨と存じ召捕つて候。地きつと御糺明然るべしと申し上ぐる。頼朝聞召しいしくもしたり行氏。先年大佛供養の時。惡七兵衛景清が頼朝を狙ひし例もあり。いかさま仔細あるべし眞直に白狀せよ。陳ゞなば拷問せん　フシ如何に。如何にと仰せけり。地入道ちつとも臆せず今は何をか包み申さん。詞某は御舍弟九郎判官殿の家臣。武藏坊辨慶が父田邊の別當辨眞が生き殘りたる身の果候。君今天下の武將と仰がれさせ給ふも。全く判官殿の戰功なるに。地讒人の口によつて片時も安堵の思ひなく討たれさせ給ひ。子にて候辨慶も。冥途の御供仕りぬ。せめて無念を晴さんため。あはれ討死したる御家人どもが。產み捨てし子にても候はば。幼少なりとも狩り集め。心ばかりの弔ひ戰仕らんずる血祭に。先づ讒者を一矢と心掛け忍び寄つたるかひもなく。海野とやらに見付けられ白狀無念の至りなれども。君ゆゑ捨つる老の命とく〳〵首を召されよと　フシ返答すゞしく申しける。地頼朝暫く御思案あり。これ一應の事ならじ。後日に評議あるべき條先づそれ迄はいたはれとて。和田の義盛に預けらる。時に工藤左衛門祐經罷り出で。詞誠に彼の法師其の儘置かば何事をか仕出し。御遊興の妨ならんにいしくも仕つて候ものかな。地何にても御褒美をと執成せば君御悅喜の餘りに。尤々何にても望めよと仰せける。海野面目施しこは冥加に叶ふ

上意かな。然らば御秘蔵の御馬なれども松島月毛を拜受せば千町萬町の御加増にも勝りて悦び奉らんと申しも果てぬに祐經。ヲヲ何しに上意に違變あらん。それ〳〵松島月毛を早く牽けと取り持つ處へ。仁田の四郎忠常憚らずつつと出で。詞これ〳〵工藤殿。彼の御馬には言ひ分あり。先年某富士の人穴へ入りし時。御褒美望めとの上意ゆゑ松島月毛を願ひしかど。御出陣の召し料とて其の願叶はず。地なんぞや老耄の痩法師を召し捕つたる御褒美とて。只今海野に湯はつては忠常が武士道立たず。且は君の御依怙にもなるかなり。よしそれとても御取持にて是非海野に下されなば。感外ながら御前にて見事な思案を致せしぞと色をちがへて言ひければ。祐經えせ笑ひこれ忠常。詞以前は以前今は今。地御邊が望あればとて。日本の武將として誰に恐れて御言葉を違へさせ給ふべき。して又海野が拜領せば見事な思案致せしとは。どうした思案ぞ聞かんといへば。詞いやさ思案までもなし。彼の御馬を胴中より二つに斬り。頭の方は某海野には尾筒の方。地半分づつの切り取りぞといへば海野もせいて膝立て直し。詞なに我が拜領の御馬を半分宛切り取るとは舌長き雑言。愛宕白山指でもささば塩忍せじと肱を張る。ヲヽサ拜領したくばして見よ。諏訪八幡も照覽あれ馬人共に一討と。地三方論義の意地づくにフシ各々手に汗握りけり。地大將扇を上げ給ひ暫く暫く兩人先づ〳〵。詞静まれ〳〵。これは雙方道理にて頼朝無念なり。先づ彼の馬を頼朝が預つたり。扨此の上は兩人共に今二度づつの手柄をせよ。以上三度の功名早き者に取らすべし。此の言葉相違あらば氏の神の御罰を得んと。忝くも御大將御誓言ありければ。二人はあつと頭を下げ恐れ入つたる禮儀の體。大將軍の御料簡フシ各感ずるばかりなり。地重ねて仰せ出さるるは。今辨眞が言葉によつてつく〴〵と案ずれば。平家の餘類を始め義經が家人等。錦戸が一族伊東入道が末葉なんど。頼朝に怨みある者多かるべし。敵の末は根を斷つて葉を枯らせと傳へたり。仁田海野に言ひ付くる。父の知れぬ幼き者を尋ね出して吟味せよ。假令遊君下女たりとも其の父分明ならぬ子は。懐胎なりとも腹を割き。屹度詮義を加ふべしと仰せ嚴しき御狩場の。番手々々の槍印。御馬印の目に高き。富士の裾野に三重〳〵出で給ふさる程に。地仁田の四郎忠常は海野と功名爭ひてあはれ御敵の末を詮議し出し高名三度數を合せ。松島月毛を拜領し。海野工藤が口抑へんと駒を早むる大磯の。浪こゝ許や並木の蔭より若き女つつと出で。詞これ申し仁田様。お待と見受け參らせ些と頼み度き事候と。地面しかと取る若黨どもこは狼藉と立ち騒げば。仁田元よりさる者にてやれさなせそ〳〵。詞見かけて頼むとあるを聞屆けでは通られず。シテ。頼むとは何事なるぞ仔細によつて頼まれうがとあれば。

先づ以て忝し。必ず其の御言葉を違へさせ給ふなえ。地いや餘の儀でも候はず。自らは今朝御狩場にて。海野とやらんに捕はれし入道が嬢。花野と申す者なるが。詞親の入道武藏坊辨慶が父。辨眞と名乘りしはかつて偽。誠は曾我殿の下人鬼王團三郎が父。津藏の入道と申す者。地お主の畝祐經に一矢と思ひ忍び入り。其のかひもなく召捕られ候が。御前にて鬼王團三郎が親なりと有の儘に名乘りなば。御勘氣の曾我殿の大事と思ひ名を隱し。辨慶が父辨眞と申せしと存ずるなり。それにつき鎌倉殿より。地父親知れぬ子のあらば。懐姙なりとも腹を割き。證議せよとの御仰を承り給ふとかや。賴み申すはこゝの事。曾我兄弟の人々浪人の徒然に。折々色里通ひ馴染の方もありと聞けば。遊女の腹に情の胤の宿るまい物でもなし。よし其の事は構はねども。それからそれがどうこけて御兄弟の身の上に。萬一御祭ある時はもと自らが父入道が。仕損じより事起る是をあはれと思召し。御聞き屆け候ひて若も曾我殿の子胤など候はゞ。御料簡願み奉ると理を盡し事を設けフシ手を。合せてぞ歎きける。地仁田聞きもあへず扨はお事は聞及ぶ。鬼王が妹今朝の入道も鬼王兄弟が親なるとや。扨々餘儀なき賴み事心得たりと言ひ度いが。詞ここに一つの難儀こそあれ。海野と某御前にて御馬拜受の爭ひゆゑ。三度の手柄ある者に賜らんとの仰なれば。何をがな手柄にと意地を張る眞最中。地曾我は伊東の末なれば我が君の御仇。海野に先を越されては某男立てられず。さりながら女の身として主を庇ふ志のやさしければ。八幡見通し聞き通しぞ少しも氣遣ひせられなとあれば。なう賴もしや有難や必ず賴み奉る。其の御返禮に參らする寶のありと。守袋より一包を取出し。これは韃靼國より渡りたる虎の生爪にて候が死したる虎の爪はあれども生爪は稀なる物。誠や虎は獸の王なる故。地を走る獸の怖ぢ恐るゝと承る。狩人此の生爪を持ち狩に出づるに。如何なる荒熊荒猪も易々手取に致す事猫の鼠を取る如し。之を御身に附け給ひ猪とも熊とも引つ組んで。人の及ばぬ御手柄を遊ばさせ給ふべし。いで〳〵證據を見せ申さん。隨分其の御馬に鞭を打つて駈け給へ。止めて見せんと言ひければ。地不審ながらも忠常は。心得たりと乘り出す娘先に立ち塞がり。追戻せばたちたぢく。とろ〳〵〳〵と千鳥足。四足を折つて恐れしはフシ不思議なりける次第なり。地忠常我を折り喜びて。希代の重寶手に入るからは御狩にて高名し。望みの御馬を拜領し富士の高嶺に名を擧げん。此の上は曾我兄弟如何なる狼藉ありとても。又は子孫のありとても弓矢八幡見通しぞ。お事が父入道も和田殿と內通し。必ず助け得さすべし人見付けては如何なり。さらばさらばも餘所事に聞き捨て行くや時鳥。五月の空の雨雲に紛れて。こそは三重八別れ路の。

フシ皆の移り香。炷きしめて。地蓋迄寢るを作法にて。餘所と門地の フシ揚屋町。亡八の亭主下々迄それを習ひに朝寢する。大磯小磯化粧坂朝顔知らぬ里ぞかし。地かゝる處へ町の番太慌しく。詞何事やらん御詮議とて仁田殿海野殿御出なりと觸れ歩く。地町の年寄五人組。寢ほれ髪に袴肩衣オクリ土に〳〵手をつき居たりける。地程なく兩人入り來り。詞やあやあ町人ども。此の度仔細あつて姙娠を詮議する。夫妻正しき者は格別下女婢女は言ふに及ばず傾城とても吟味する。懷姙の女一人も殘らず出せとありければ町人ども承り。さん候下女どもには一人も候はず。傾城の中に三四人姙みたる者御座候。地それまづ富士屋の竹取出でよといへば。戀には恥ぢぬ傾城も。包む色にや胸高の フシ帶で。隱すもしほらしや。地海野仁田言葉を揃へ。詞汝が姙みし子の親は何者なるぞ。帳に記し御前へ上ぐるぞ僞るな眞直に申せ。地さん候此の子が親は京の衆。折々ごとに濡衣の人目を包む闇の夜や。烏丸烏帽子屋の。折樣と言ひければオクリ海野〳〵帳にぞ留めにける。地次に出でしは井筒屋の。檜垣と申す新造と。側からいふもフシ恥かしく。褄襖の褄。打合せ。見せじとすれど振袖の。下より漏るゝ二重嵩其の子が父は誰なるぞと問はれて顏も赤くなり。紅葉が谷の客なるがひよつと變るな變らじの。其の言の葉で孕句や連歌師の山樣と。フシ同じく帳にぞ付けにけり。地其の次は眉目惡く。歩き振りさへ横町の青柳と申し候なり。詞扨汝が胎内の子の親は如何に。地誰と申して我が身には。二人の客もあら磯の。荒井の宿の馬方にて本の名は六藏。かへ名は四の二もの思ふ。歌流れ憂き身をすてゝんある。ある人の申されしは色も顏もお腹も脈も唯ではない。定めて〳〵あん。青梅好きやるならば惡阻でござろ。面妖や不思議やはや七月とぞ答へける。地さて其の次は虎御前。おめる色なく二人の前に立ちながら。お尋ねなれども自らは身持には候はず。勤めの憂さがつがへとなり斯かる病を受け候。よし又身持なればとて。夜な〳〵變る男の數どれがどれやら何のその。それに覺えのあるものかと言ひも果てぬに海野はつたと睨み。詞扨々ぶとい賣女奴かな。己れ曾我の十郎が子を姙みしを知るまいと思ふか。地サア有りやうにぬかさぬかとぞ嚇しける。仁田曾我といふ聲に花野が契約思ひ付き。詞イヤこれ海野。浪人なれども祐成も侍押し付けてさうも言はれまじ。病とあらば病にして帳面をすまされよといへども海野聞き入れず。宥免するも事による。曾我は君の御仇不吟味にはなり難し。誠あかさずば腹を割かんと詰きける忠常ちやくと思案を出し。地エ、是非もなし何をか包み申さん。あれは拙者が子なれども世間を憚り。祐成といふ假名をし遣手禿亡八中へも。懷姙する迄隱せしが手詰になれば打明ける。沙汰なしに賴むといへば粹

の皮着る虎御前。詞ハテ卑怯千萬な。地假令爰にて死ねばとてそれを今言ふ事かはと。フシ詞を合はする利發さよ。地海野かぶりを振つていやさお言やるな。詞此の場をさまし重ねて曾我が所縁とて引出し。一人の手柄にせん巧みな。但し虎と剛染ある正しき證據ばしあるかとひどく問ふ。ムヽシテ。證據あらば宥免あらうか。地後に否と言はせぬがと詞をつめても證據はなく。心を碎き實に思ひ出せしと。花野が與へし猛虎の爪懷中より取り出し。これ此の書付を見給へ虎の生爪と書いてある。離しくれたる虎守りに懸けたる間夫男。疑ひめさるはヲヽ合點々々。今朝の遺恨に胎内の悋を殺さん心底は。白癩樣に下郎にも劣つたりと恥しむれば。誠とや思ひけん勢にや恐れけん。アヽ短かし忠常證據あれば疑なし帳面もむつかしと虎は病に片付きし。仁田が思案なかりせば フシ危き曾我の運命なり。地かかる所へ海野が方へ祐經より早使。詞富士野の御狩最中にて。只今幾年經るとも知れぬ猪。荒れ出で。勢子四五十人懸け殺し各々あぐんで見え候。早く御越しなされ此の猪止めて高名遊ばし。御望の馬拜領あれ事急なりとぞ告げける。地海野はつといふ三重へ如くなり フシ案の如く。地狩場には幾年經るとも知らぬ猪の。牙は劍の如くなるが鹿矢三つ四つ負ひ乍ら。近付く者をかけ倒し下り合ふ者を踏み散らし。大きに猛つて巖窟を小楯に構へ鼻を吹き。寄らば懸けんず勢に人々馬をたて兼ねて フシ勢子も。しどろにたゞよひける。地養由が術きより敵ふべしとは見えざりけり君圍扇をひらめかし。誰かあるあの猪止めて高名せよと。コハリ呼ばはり給へば武藏の國の住人。太樂の平馬の丞某止めて御酒宴の御肴にと。夕日かゞやく大太刀を抜きかざし進みに進んで出でたりける。猪は巖根に身を伏せて飛びかゝらんとる氣色たゞ。牛鬼とも謂つべし詞には似ざりけり。面もふらず逃げて行く。平馬が姉婿愛甲の三郎熊手提げかけ向ふ。猪は身を振り飛びかゝり弓手の腕を懸け切れば。熊手を捨ててぞ入つてける。安西の彌七郎返せ〳〵と聲をかけ長刀構へかけ向ふ。猪は怒つて齒をみがき唸りて。かゝる其の聲も高股を引つかけて。三間ばかり振り上げしは。鞠の曲とも謂つべし。コハリ臼杵の八郎景信續いてかゝれば隙間なく。股の附け根を引つかけられ眼眩んで引いたりけり。御所の黑彌五是を見て。大の尖矢打番ひ暫しかためて。切つて放す矢よりも早く飛び來り。腰のつがひを横がけにざつふとかけてぞおッとしける。岡部の三郎原小二郎。槍提げ兩方より上段下段に包み突き。猪は一期の死に狂ひひらりと飛んではかつしと跳ね。くるりと廻つて丁どかけくる

り〳〵はた〳〵。蝶鳥なんどの如くにてひるむ氣色の見えざれば。二人もあぐんでさつと引く。猪は巖根に身を縮め鼻の嵐に猛りをかき。息つぎ 地居たる有様は。オクリすさまじ〳〵かりける コハリ次第なり。新開の荒四郎。憎し穢し方々よ。鬼神にてもあらばこそあの畜生に恐れては。誠の合戰なるべきか某が打殺し。皮引つ剝いで障泥にと突棒取りのべ振つてかゝる。猪は睨んで齒を鳴らし只一かけにと唸りぬる此の勢に驚きて。突棒からりと投捨て鹿垣左右へ押破り。高這ひして逃げければ數萬の狩人 地聲を上げ。フシ一度にどつとど笑ひける。 地海野小太郎行氏眞一文字に駈け來り。此の猪を組み止めなば高名三度に足らずとも。御馬を拜領致さんと小太刀を搔い込み躍りかゝれば猪はすかさず一足に。飛ぶとぞ見えしが小太郎が膝口より 踝まで。眞下りに懸け通せば片足立ててちがちがと。 フシ勢子の中にぞ逃げ入りける。 地今は下合ふ者もなく徒らに守り居る。かゝる處へ仁田の四郎後れ馳せに駈けつき。あらもの〳〵し仰々し。漢の李廣は石虎を射る。明の金氏は女なれども猛虎を討つて夫を助く。假令鐵石を丸めたる猪なりとも。しや何事かあるべきと簸竹笠かなぐり捨て。えい 地やつと聲をかけ二丈餘り飛び上り。向ふさまに乘り移れば逆にこそ乘つたりけれ。猪は乘られて怒をなし土を蹴立て木の根を穿ち。雲と霞に分け入つて。飛び越え跳ねを飛んで廻りしは周の穆王法の爲。八疋の龍馬に乘じ萬里を刹那に到りしも。フシ斯くやらんとぞ見えてけり。仁田は馬上の名人にて。樂天が三つ頭王良が祕密の鞭。尾箭を手綱にしつかと取り腰も切れよと締め付け。締め付け服行膝は山おろしに。さら〳〵さつと千切れてのけば大童に亂れなつて。只落ちじ〳〵。落ちまじものと堪へける小節萱原巖石枯木打ちつけ。打ちつけ猛越え三重〳〵駈け上り フシ又駈け下り。 地虚空に越え 駈け上り りをかき。落ちなば懸けんとあがけども。忠常虎の爪持てば其の威勢にや恐れけん。とある伏木に躓きて弱る處を誤たず。指添拔いて肋骨四五枚はらりと搔き切れば。四足を土に踏み入れて立竦みになる處を。やがてひらりと飛んで下り數の止めをさしもの猪。仕止めて仁田は悠々と扇を使うて立つたれば。大將軍を始めとし大名小名勢子狩人。足輕荒子一同に乘つたり仁田止めたり四郎。手柄々々と 地喚く聲 フシ山も崩るる如くなり。 地賴朝御感限りなく。仁田が振舞數箇度の高名にも勝りたり。望なれば松島月毛を取らするなりと宣へば祐經進み出で。 詞松島月毛の事は高名三度ある者に賜らんとの仰なり。たとへば如何なる雷と組めばとて。三度の都合も合はざるに忠常に賜はるは。海野の太郎に腹を切れとの御所存かや。 地先づ此の度は御無用と。たつて止むれば我が君もけにもとや思しけん。先づ〳〵休息仕れと御本陣に入り給へば。

大名小名人數を卷きすゑ皆々〳〵假屋に入り給ふ。地仁田本意なげに見送りエ、憎つくし祐經めが。海野と緣者たる故に彼奴に警をつけんため。度々我を妨ぐる。所詮祐經が首を取つて此の無念を晴さんと。立上る處へ若者一人木蔭よりつつと出で。詞これ申し仁田殿。前代未聞の御手柄目を驚かして候。拙者は曾我の十郎祐成と申す者。地先刻廓にて虎が難儀を御身に受け。救はせ給ふ御懇情生々世々の御高恩。御禮申し上げ候と頭を地につけ禮儀をなす。詞なに〳〵承り及ぶ十郎殿とや。某猪を止めたるも。御家來鬼王が妹とやらん虎の爪を與へし故。地其の契約に虎御前を助け申し候へば。フシ御禮は爲替に仕る。地扨此の爪を返辨申す間花野とやらんに返してたべ。某は祐經めを討たでかなはぬ意趣ありと斷り出づるを引止め。詞重々の御無心なれどもさりながら。祐經は我々が大事の親の敵なるを。御分に討たれては曾我兄弟が侍立たず。地暫しの無念を休められ彼奴を我等に討たせてたべ。討ち了せてあるならば御前近く斬り入らん。時には大勢下り合はん。千騎萬騎防ぐとも我々兄弟物の數とは存ぜねども。仁田の四郎忠常と御名乘を聞くならば。首差し伸べて討たれ申さん聞き分けてたべ仁田殿と。理を盡したる詞の末忠常打頷き。フ、神妙々々面白し。さあらば祐經討ち給はゞ和殿が首は貰うたぞ。如何にも進上呉い。それ迄隨分御堅固に。其方も御無事にお暇申すフ、最早御座らうか。首を取つたり遣る迄の先づ〳〵これがお暇と。互の一禮こまゞ〳〵と降る五月雨やさら〳〵〳〵と竹笠取つて打ちかづき仁田は假屋十郎は。伏屋をさして立歸る。ハルフシ迹べも迹べたり。地答へも答へた武夫の詞の末は神妙。神妙いやはや言語に盡くし難しと押しなべ。聞く人感じける。

第二

己れが人に及ばざるを恨みず人の己れに勝るゝを妬むは小人の習ひ。されば海野小太郎行氏。仁田と武功の爭ひ蝸牛の角のつめ立ち挑みはげむと雖も。仁田が猪に乘つたりし手柄に續く手柄なく。心は高上手はたゝず。フシ空しく氣根を費しける。地元より祐經緣者といひ仲好しなれば。彼の辨慶が父辨眞と名乘りし津藏の入道を。鬼王が親とは夢にも知らず和田に預け置かれしを。工藤祐經取りなしにて暫く預かる其の手だては。狩場の見物群集の中辨眞を引き通り。若し見知つたる者あらばそれこそ義經の家來筋。鎌倉殿の御敵と召捕つて御前に出で。仁田が手柄を踏み付けんと。巧む思案も廻り遠き野山を引いてぞ三重〳〵めぐりける。フシ曾我兄弟は地聞き及び譜代の下人を囚人となしては亡からん跡迄恥辱なるに。人もこそあれ和田殿の御預りこそ仕合なれ。窃に歎き申して見んさり乍ら。祐成は人見知れり。昨日今日の元服にて五郎は見知る者あらじと。鬼王兄弟妹の。

花野を五郎に相添へて　フシ和田の假屋へ急ぎける。海手山手を。限りにて。地大垣亂杙逆茂木引き。東海東山三十三ケ國の大小名の假屋の前。所々に木戸を打ち。家人商人見物の中を紛れて行くうちにも。時致は此の夕敵討たんと思ひ込み眼を四方に見くばり案内窺ひ通りける。處こそあれ海野が持の木戸口にて覿面にはたと遇ふ。花野父を見付けあれよといへば鬼王團三郎。こは如何にと仰天す入道はつたと睨み。詞やあ何なれば狼狽面。此の入道に見知られては詮索がむつかしからう。地早く通れとつかうどに言ひ放す。海野敏き男にて。詞いや〳〵汝等が有樣兩方見知つたるに紛れなし。何者なるぞ眞直に言へ。さなくば跡へも先へもいつかな事やらぬといふ。鬼王兄弟つつと出でいや〳〵。我等は上方の貧者にて候が。これなるは妹老いたる親を育みのため。奉公稼ぎに方々召連れ廻り候が地何方にてやら彼の御坊を見たるやうに候故。扨只今の通りなりと言ひ捨てて通らんとす。海野どこへと引留め。詞シテ其の見たるといふは何處にて見たぞ。胡亂ならば通しはせぬ。地勿論戻しもせぬぞとてフシ腕を捲つて氣色する。地鬼王兄弟一期の大事と思ひ。是は近頃不祥なる所へ參りかゝつて候ものかな。然らば方々廻りし次第。スエテあらまし語り申すべし。地先づ上方の女の習ひ大内方を望むゆゑ。中宮女院仙院十二の對の局々の女嬬お末。内侍所の刀自來女フシ公家に松殿。濱殿の。近衛關白政所一條殿や九條殿。久我菊亭に花山の院頭の中將頭の辨。儀同三司女三の宮。御比丘尼御所迄稼ぎしかど。フシ御所の風には合はずして。兩六波羅の屋敷方。武家は行儀むつかしく爰もあり付く緣薄き。衣の棚や數珠屋町めぐり〳〵て室町の糸屋。組屋や囉女に。御影堂の扇折骨身を碎き稼げども。都の奉公口もなく西國方へ身をしぼる。豐後の國の染殿や因幡の。國の紙灑き奉公フシそれより紀州熊野には。好き奉公の口ありと。聞くをしるべに立ち越えしに。それは小歌比丘尼とて尼にする由承り。逗留もせず歸りしがヲヽそれよ〳〵。今思ひ合すれば。熊野山家の何處やらにて一寸見たる御坊にて候。海野聞きもあへずエヽうぬめ等はしれ者かな。入りもせぬ長口上紛らかして通らんとや。寮する處己れ等は。義經の家來熊野の住人鈴木龜井が一族よな。此の辨眞めと心を合せ。鎌倉殿へ仇をなす御敵の張本ソレ。通がすなとひしめく處へ。五郎時致編笠取つてつつと出で。詞これは近頃權柄なる仰かな。あの者どもは某が召抱への下人ゆゑ。最前より腸が燃え胸の蟲がむか〳〵と堪へ兼ねて候へども。無事に濟まばすまんと齒をくひしばつて控へし所に。理非も弘に聞屆けずなんぢや搦め取らうして如何樣の科かあるさあ承らん。地科もない下人を搦めさせ主人の身にて堪忍ならじ。町人なれば太刀刀のお相手には

叶はずとも。腕や臑の力には御侍にも負け申さぬ。張りごくら踏みごくらは此の。膝骨の砕くる迄と。フシ臑打ちたゝいて睨めつくる。地されども海野はちつともひるまず。調これさ若い者。たとひ其の方が下人にもせよ。是は頼朝公の御敵判官殿のゆかりを尋ぬる詮索なれば。言うても天下の御大事誰をか憚るべき。此の入道こそ辨慶が親田邊の別當辨眞よ。それに親しき者なれば。鈴木亀井が一族ならんと咎むるが僻事か。地彼奴等を下人といふからは。フ、推したり義經の落し子ありと聞けば。扨は汝等はそれなるよな。爰での論は無益誤りなくば。御前にて。速に言ひ譚せよ御所の假屋へ同道せん。はや歩めさあ來いと言はれて流石の時致も。御前へ出ては悪しかりなんとッシ返答。遅々して見えにける。地入道これぞ一大事と思ひ。調扨は己れ等は先づ何者なれば。何の用もなき事を仔細ありげに言ひなす故。科もなき判官殿のいよ〳〵御科深くなり。勿體なくも御骸に苦患をかくる後世の迷ひ。いかさま騙りか物取りならん。地エ、腹立ちや憎つくい奴かな。しばし御免と郎等どもが突いたる寄棒おつ取つて。續け打ちに時致を丁々と打つたりける。これはと言ひて鬼王兄弟立ち寄るを容赦なく。ャァ己れ等とても只置かうかと。拂ひ打ちに叩きつけ〳〵。さればにや判官殿御存生の折からに。東下りの忍び路や安宅の關にて我が子の辨慶。判官殿を打つたるとや。それは富樫を欺罔の智略の棒のゆがみなき。此の辨眞が心底を海野殿への言ひ譯に。叩き殺して見せ申さんと口には言へども心根は。主君なり我が子なり思ひの色を腹立ての涙に見せて打つ杖も外れよかしと。打てば此方は悟られじと。用捨もなく身に受くるスエテ互の心ぞ哀れなる。地海野我を折りヤレさなせて辨眞。殺しては如何なり最早よいわと引止むる。いや只殺して見せ申さんと猶振り上ぐるを掴ぎ放せば。エ、残念や口惜しや。草の蔭にて判官殿さぞや悲しく思されんと。義經にかこつけて胸に保ちし涙をぞ。わつと泣き出す其の心鬼王兄弟時致も。思ひやりたる忍びねの。フシ歎きを。隠して俯向けり。地海野重ねてこれ〳〵若者。調以前彼の者が主人と言ひしが何處の町人商賣は何なるぞ。されば某は奥州伊達の郡の傾城屋にて候が。あれなる女を金銀出し傾城に召抱へ。只今連れて下り候。ムム然らば定めて傾城の請狀あらん。それにて讀め聞かんといふ。

傾城請狀

地元より請狀あらばこそ。懐中より夏書しかけし普門品を取り出し。請狀と名付け高らかにこそ讀みたりけれ。地傾城奉公請狀の事。一此のなみと申す娘流れの道に身を沈む。時に建久四年癸の丑。五月十五夜突出し女郎。いづくの雲も障なき彩もまる年十年きつて。金子百兩確かに。地手取りの身は籠の鳥。親は他國の死に目なりと

も年の間は廓の外へ。ハルフシ一歩にてもふみも通はぬ遠國波濤へ。賣りてやり手や姉女郎の掟。背かず勤めさせもがフシ露程も。奉公に如才なく。客をば振らず心にかけてギンハルフシまはる。紋日を。一日も忘らせ申すまじ。第一には間夫狂ひ。浮名黒子に入れ性根する。男あつて。勤め粗末に致すに於ては着の儘ながらの端に下され。又は水仕の下女にせられ。竈の火を焚き湯殿の水。フシ門掃き背戸掃き。庭の掃除や塵や芥の紙くずの葉の恨みと存じ候まじ。萬一此の者年の内。廓を逃げて走り井の水に。身を投げ刃に伏し。心中して死したりとも御難はかけじ何方迄も。フシ請人出でてさばきがみ油元結紅鼻紙。足駄雪踏に至る迄。ハルフシ仕着の外は身の入れ立てとの定めなり。若し又深き縁のありオクリ戀ぞ。積りてみなの川。誘ふ水とて請出す。慣千金萬金なりともそれは主人の得分たるべし若し誰人ぞ流れの身に。横波かけて妨げのさし出の磯のもがり舟。推して暇を取るならば衣裳殘らずはぎすゝきのフシ奉公構ひ給ふべし。總じて勤の其の間下戸なりとても酒飲み習ひ。文には嘘を書き習ひ。床にて人をやき習ひ癖ぶたきとても居眠らず。泣き度うなくとも後朝の。フシ別れに押へて泣かすべし。起請誓紙に身の中の血をば惜ませ申すまじ。指は切り損髪も切り損申し分候まじ。其の外なにはのよしあしにつき後日の爲の傾城奉公請狀。依つて件の如しとフシ天も響けと讀み立てたり。

海野の太郎疑晴らし。扨は仔細もなき者なり疾う〳〵通れと許しければ。時致しすましたりと思ひ。御聞き分け先づ以て忝し。扨最前より承れば。判官殿の所縁御尋ね候とや。それにつき我等が本國奥州には。其の末々多く候へども手を措き構ふ者もなし。あの辨眞めが我々を打擲致せし返報に。拙者に預け下されば。搦めて國へ連れ下り辨慶が親を捕へしと國中に風聞せば義經の所縁ども堪忍せず。集らん所を皆々催し搦め取つて參らせん。一つは旦那の御奉公にとフシ誠しやかに呀けば。海野ほつかと落され。扨々これは過分な心入れ。彼奴は某我が君より預りし奴なれば。如何樣にしても苦しからず。人を添へ御分に預けん彼を囮に搦め取つて。我が手柄にさせてくれよ必ず賴むそれそれ兵五兵六。兄弟かれに附いて行け。隨分ぬかるな沙汰はしすな。判官の末類を多くも入らぬ一兩人。生捕りてくるゝなれば此の海野は手も下さず。嚙ませて飲んだる大手柄屹度禮は重ねて重ねて。急け〳〵と別れしはオクリ愚か〳〵にも亦あさましし。兵五兵六是は不思議の同道いざ參らんと勇みける。時致あたりを見廻し鬼王兄弟に目くばせし。二人を左右へばた〳〵と蹴倒すコハ狼藉と起き上がるを。鬼王兄弟つゝと寄つてしつかと取る。時致から〳〵と笑ひ。やれ腑抜面が家來のまた腑抜面ども。我を誠の町人と思ふか。河津

の次男曾我の五郎時致といふ者よ。此の人道は鬼王團三郎が父なれども。我々を庇ひ辨慶が親と爲りしを。鎌倉殿を始め大名小名の毘口へ。うま〳〵ときこし召したる可笑さよ。地何とぞ奪ひ返さんため。和田殿へ參る折柄海野殿の運のつき。好い所で出くはせ此の時致にたらされ。お預りの大事の囚人うか〳〵と渡さるゝは。猫に鰹武士に似合はぬ甘い事。詞これ爰ななまぶしどもゝうぬめ等が首より爪先迄微塵に倒つて。地兄祐成が手飼の虎に惡ばせんそれ〳〵と。引起し口にこみ藁いきぼねたゝすな山際にて討つて棄てよ。扨又入道妹は故郷へ送れ。某は祐成の狩場の出立氣遣し。追付いて本望遂げん門出よければ行く先の。仕合は手に取つたり。吉左右知らせん待ち奉るぞ。莞爾と笑ふ顔と顔。主從此の世の見納めとは後にぞ思ひ三頭へ知られたる。フシ其の日の御狩も。地勢子を上げ息を休むる午の刻。御辨當と觸れければ フシ狩場も暫し靜まりける。地爰に富士のねがたより。七年物の牡鹿一疋八つ股の角振り立て。險岨苦路をのさ〳〵と北を差して落しける。秩父の家臣本田の次郎親常天の與へと弓と矢番ひ。駒を直路に歩ませ寄り既に矢頃と見えし時。工藤左衛門祐經一散にあをりかけこれ〳〵本田の次郎。詞あの鹿は祐經が見附け射止むるぞ粗忽すなと聲をかくる。仰に渡す法はなし。狩場の習ひ目がけし鹿を人に御覽に入れ申さんと。地猶引きしほれば祐經怒つて。詞ヤァ緩怠なり親常。秩父が下人陪臣の分として。此の祐經に慮外をなす地虞言吐いて乘出す親常無念に思へども。慮外といへば力なく。エヽ已れ祐經め。矢印に名乘なくば遠矢に射落してくれん物を。と。拳を握つて控へし處に曾我の十郎祐成。祐經を遙かに見付笠引つ込み弓を伏せ。繁みを分けて忍び寄る本田きつと見て。詞これ〳〵申し祐成殿。忍んで御狩の御供の由主人重忠聞き及ばれ。御用あらば承れと申し付けられ候が。貴公數年御狙ひの鹿こそあれへ見え候へ。地さり乍ら彼は馬上貴公は徒歩。幸ひ親常も當座の遺恨候へば。此の馬を貸し奉る召されて鹿の眞直中。恨みの矢壺は外れ申さじ人目あればお暇と。下り立ち馬を與ふれば祐成手綱を押戴き。兎角は言葉多からずとひらりと乘つて駈け出す。不思議や此の馬身の毛を立て四足を縮めて立ち竦む。撻てども〳〵あをれども ちつとも動かず跳ね上り。前足折つて祐成を眞逆樣に跳ね落せば。祐成は枯抗に フシ弓杖ついて下り立つたり。地落して馬は輕々と谷を下りに駈けて行く。折しも時致遙かに見付け走りかゝつて馬の口。しつかと止めて引き來り。扨よき所へ參りたり鎧を踏みしめしつかと召せ。心得たりとひらりと乘れば又此の馬高嘶し。躍り上れば祐成は屏風返しにどうど落ち。岩角にて胸を打ちゥエテ氣を失ひたるばかりなり。地時致

はつと抱き上げ。エヽ憎や此の馬は目前の敵刺し殺さんと飛びかゝる。祐成はつと心付きやれ待て時致。地全く馬の過ならず。よく〳〵思へば花野が仁田に與へつる。虎の生爪懐中せしが恐れたるに紛れなしと。守袋より取出し遙かの谷へ投げ捨てて。駒引寄せ打乘つて引つ立て見れば不思議やな。元の如く歩み行く。續けや時致來れや五郎と谷を乘り越え乘り下ろし。丘の萱原麓の松原おつ返し尋ぬれども。はや祐經は見えざりけり兄弟目と目を見合せ。拳を握り牙をかみ寶の山に入りながら。空しく歸る口惜しさよし〳〵今日は助くるとも。明日まで生けては置くまじきぞ此の富士山は死出の山。富士川は三途の川兄弟瀬踏みの門出祝ひ。酒宴せんと打笑ひ戯れながら立歸る。揃ひに揃ひし武士の。手本なり鑑なり教なるはと後の世迄も盡きぬは。曾我の話なり。

第三

次第身は蜉蝣のうき命。身に蜉蝣のうき命。暮るゝや フシ限りなるらん サシ○頃しも五月廿八日。空五月雨るゝ黄昏の口虎が涙や少將の。スエテ夜の雨さへ頻りなるに。地兄弟最期の晴小袖。母の手づから縋ひ仕立。受けし五體の胎内へ歸る心に本來の。經帷子と フシ觀念し瑞羽の蝶や。群千鳥も翼しをるゝ風情にて。松明かゝけ笠振り上げ兄弟顔を見合せて。スエテ涙ぐみたる哀れさよ地○如何に時致。和殿三歳祐成五歳。竹馬に鞭を打ちしより。片時も離れぬ弟兄の六度契りて兄となり△七度結びて弟となると傳へしが口今宵袈裟野の五月雨草の雫と消え果てゝ。未來の逢ふ瀬は定めなし。今ぞ此の世の見納めぞや。御身が顔をよつく見ん△母上を見奉ると思ひ祐成殿の御顔をも。今一度見せ給へ口事とはぬ草も木も。雲水空の名殘迄。フシ今を限りの別れぞや。いつも風は。吹きけれども。今宵の風ぞ身にはしむ。虎少將が書置をあけなば歎かん不便さよ△鬼王や團三郎が最期の供に外れたる。悔みの歎きこれ一つ○二の宮の姉△禪師坊口かれこれ盡きぬ思ひの涙敵を討つて本意を遂けん。嬉し涙も樣々の雨に爭ひ袖と袖フシしぼり。秉ねたる。ばかりなり 地△時致彼處をきつと見て。あれ御覽ぜよ御所の假屋の方よりも。供人具したる乘物の。庵に木瓜つけたる提燈祐經にまがひなし。髮に待ち受け本望遂けん口尤と松踏み消し。天にも上る心地して フシそゝろ。ふるひて待ちかけたり 地○程なく乘物近付けば△雙方よりつつと出で二つの提燈切り落す 地口あに。中間若黨縱横に打物拔いて薙ぎ廻ればは狼藉と夕闇の刺すとも突くとも知らぬ夜。二人は陰に身を潜む フシ危かりける有樣なり 地○奥の中より女の聲にて。詞必定夜盗と覺えたり大路へや出でつらん。髮を捨て置き外垣より山際を探されよと。地あらぬ方へ教ゆれば口愚かの下人尤と フシどろになつて追つかくる。地○彼の女奥よ

り出で小聲にて。十郎様か五郎様か最前ちらと見付けたり。大事ない時致様祐成様と呼ぶ聲は△聞いたやうな物ごしと思へども粗忽に出でられず○女はせいてァ、辛氣。詞私は喜瀬川の龜菊ぢやわいなあ 地△兄弟はつと力を得。詞シテ龜菊のかうした事は合點行かずといふ 地○聲をしるべに近寄りて。詞先づはお久しや扨私ことはナ。地虎様や少將殿の御苦勞になされし故。舞の一手も舞ひ習ひ。私が仕合にていつの頃より祐經殿に請出され。則ち主の親分にて。只今は頼朝様へ御奉公に出され。御酒宴のお肴の舞や謠や琴琵琶にて。御前を勤め候が。最前お顔はちよつと見る。若し供の者が見付け刀の先でも當てましてはと。よき智恵を出して退けましたが定めし日頃の御望ならん。さりとては危い首尾はあは〳〵と思ひし故これ癪が上つたわいな。先づ〳〵御無事でお嬉しや。虎様はおまめなか少將様は赤子生まんしたか。持病の癇氣は起りやせぬか猫の子はどうしたぇ。禿どもは相變らず今に纏錢しえすかと口急な所に取りまぜ話。フシ女郎はあどなき心なり。地△兄弟耳へは入らねどもヲ、一段のお仕合。シテ先づこれはいづくへとあれば○されば我が君五月雨の夜の徒然に。祐經殿の假屋へお成なされんとのお使にと△言ひも果てぬに時致。詞イヤこれなう。日頃知つての事なれば何をか隠さう。今宵祐經を討つ覺悟なるにそれに頼朝入り給ひては。本望遂げぬのみならず仕損ぜんは目の前なり。地何とぞ思案し頼朝公今宵の御成を止めてたべ。生々世々の高恩曾我兄弟が一生に。人を拜むはこれが始めとフシ手を合せてぞ頼まるゝ 地○龜菊暫しいらへもせず。是は餘儀なき御頼み。虎様や少將様の緣といひお二人を。如才に思ふ心でも又祐經殿を庇ふ心でも誓文くされ無ければ。親分を討つ人にならびてなどと後日に言はれ。傾城の果てなれば尤かなと言はれん事。勤めする身の總恥なればどうもお返事なり難し。悪う聞いて下んすなとスエテあぐみし色ぞ道理なる 地△時致聞いてヲ、至極せりさりながら。日本一の思案あり。祐經を討つての後御所へ斬つて入らん時。定めて御所中下り合はん。百萬人かゝるとも事ともせぬ我々なれども。御身向つて此の時致を組み留めよ。女と見は某易々と搦められん。時には御身も親分を討つたる者を女として。組み留めしと名を取れば身一分の道は立つ。我々も本意を遂ぐ フシひらに。頼むと手をすれば 地○龜菊も恐ろしながらおいとしや其の義ならば。祐經は病氣なりと中にて御所へお返事申し。今宵のお成を止め申さん。御本意を遂げられば必ず自らに組み留められ。我が一分を立てゝたべとロいへども流石女心の身も顫はれて聲こもり。あれ〳〵追手が立歸るは一言違へな○遠へいじと口左右へ別るゝ雨の足行く方○暗く三重へ風騒ぐ。フシ虎少將は。寐がての。 地枕に残る書置

を見るより驚き年來の契はこゝぞ冥途迄。後れじものと豫てより思ひ染め置く蝶千鳥の。裝束引きかけ太刀刀髭小枕取つて捨て。地髪ばかりに鉢卷し フシ假屋間近く忍び入る。出立ち小柄に。凜々しくて。女と更に見えぞりけり。地勝手は知らず雨夜なり二人手を組み隈々を。祐成やおはする時致やましますと。小聲に呼うでうそ〳〵と尋ね廻るは過ぎし夜の。手くだのわけに事かはり。フシ胴慄はるゝばかりなり。地斯くとは知らず兄弟は袖打ちかざし松明に。足許ばかり照らさせて遙かに見ゆる虎少將。アレ夜廻りの番衆なるか見付けられては惡しかりなん。一先づ退けと一村の森を目當に走り過ぎ。オクリ逢はで〳〵別れし本意なさよ。地兄弟は祐經が。假屋の外垣切り破り中門につつと入れば。郎黨若黨悉く蓋の狩には爲疲るゝ。雨を賴みの油斷酒皆高鼾して臥したりける。所々の燈火を。吹き消し吹き消しそろり〳〵と差足し。なんなく敵祐經のオクリ一間の〳〵寢所に忍びつき。地溜息はつと吐いたりし。ノヽ心の内こそ嬉しけれ。サア 地是迄は仕すましたり。南無八幡大菩薩箱根兩所伊豆三島。力を加へ給へやと近付き寄つて見てあれば。祐經沈醉高枕前後も知らぬ其の有樣。一眼の龜の浮木に逢ひ。優曇鉢華の三千歳の。春に逢ひたる心地ぞや優曇華の咲く時は。拜みて枝を折るとかや。稀に逢うたる親の敵拜み打に討てやと。地莞爾と笑うて立つたりし。フシ嬉しさ類はなかりけり。地兄弟刀を抜き放し祐經が胸板に。當てては引き引いては當て。大音上げて如何に祐經。詞河津が嫡子十郎祐成次男五郎時致なり。地起き合へやつと言ふ聲に心得たりと枕の太刀執らんとするを祐成弓手の肩先より馬手の肋骨の外れ迄。地薙をかけて斬り付くる五郎是にと言ふまゝに。腰のつがひを板敷迄切れも切れたり年月の。仇と恨と一時に今打ちとくる氷の大刀折れもせよ碎けもせよと フシづた〳〵にこそ斬り付けけれ。地側に臥したる大藤内太刀風に目を醒まし。詞狼藉あり出で合へと裸身ながら駈け出でて。地彼方此方と喚き廻るを兄弟左右より兩脇薙ぎ四つ五つに斬り散らし。門外差して斬り出づれば夜討こそ入つたれと。弦なき弓に矢を番ひ繋ぎ馬に鞭を撞ち。太刀の柄を腰に差し上を下へと 三重〳〵返しける 地太樂の平馬の丞。祐經が討たれしは曾我殿ばらに紛ひなし。いで〳〵彼奴等を討留て狩場の恥辱を雪けやと。愛甲安西海野臼杵入れかへ。入れかへ打出づる兄弟は事ともせず。小柴垣を小楯にとり揉みに揉うでぞ 三重〳〵戰ひける 地多勢とは言ひながら。曾我殿ばらが死に狂ひに手負ひ討死四百人。足の踏みどもなかつし所に。仁田四郎忠常は。祐成に契約あり首を取らんと駈け出でしが。イヤ仁田と名乘りなば首差し伸べんは必定。それは武士の本意ならず。運づくの勝負せんと祐成に渡し合ひ。斬り結び斬りほどき戰ふ際にも祐成は。本

望は達したり惜しからぬ命なれども仁田の四郎忠常に。預つたる我が首を人手には渡さじをと。呟き乍ら打合ひたり。仁田之を聞くよりも。優しき者の志と猶恥入つて名乗もせず。物の文色の見えざれば松明出せと呼ばはる聲。祐成はつと飛びしさりさ云ふ和殿は仁田殿か。詞ヲ、忠常と答ふ。地南無三寶こは如何にそれとも知らず最前より。太刀を合せし悔しさよ。厚恩といひ契約の誓文たがへし面目なさ。サア契約の首取り給へと。太刀を投げ捨て座を組みてフシ首さし。伸べてぞ待ち居たる。地仁田涙をはら〳〵と流し。扨も〳〵やさしき今の振舞頼もしや神妙や。蛇は一寸にして兆あらはれ。頤伽は卵の内にて其の聲諸鳥に勝るゝとは。殿ばら達の御事よ。幼少より日陰の身。武士の參會も絶え百姓土民に立交り。弓馬の道も取失ひ給ふべきかと悔りしに。異國の子路が勇にも勝る只今御扶持を下さるゝ。鎌倉武士は多けれども。誰か御身に勝るべき流石河津殿の御子なり。勇力孝行仁義の道斯程達せし祐成を。如何に契約なればとて仁田などがむざ〳〵と。御首を討つべきや天の咎負弓矢の冥加。所縁の人の歎きの程思ひ遣られて今更に。いづくに太刀を當つべきぞ忠常討たれば討たる迄よ。運に任せて勝負あれなう祐成殿十郎殿と。なほ遅き棄ぬる感涙はフシ理り。せめて哀れなり。地十郎も涙にくれ嬉しき人の御詞や候。年月狙ひし敵を討ち。御身のやうなる弓取の手にかゝつて死なん事。なんぼう果報の某成佛迄も疑なし。はや首を取り給へと涙を止め言ひけれども。忠常は目もくれてスエテ討つべき氣色はなかりけり。地エ、曲もなし忠常殿。雜兵の手に罹つて名を下せとの事なるか。是非に及ばず自害せんと立上れば忠常。ヲゝ誤つたり御免あれ。此の上は是非もなし南無阿彌陀佛と諸共に。水もたまらず首打落し切先に貫き。詞鬼神と呼ばれたる曾我の十郎祐成を。武藏の國の住人仁田の四郎忠常討取つたりとぞ名乗りける。地無慚やな時致は逃ぐる敵を追つかけしが。此の由を聞くよりも今は何をか期すべきと。御所の假屋へ走り込む簾戸の陰より女の姿。薄衣被いて時致を取つたというてしつかと抱く。時致振り返り扨は龜菊ごさんなれ。今少し死狂ひに能き侍の二三百も斬り留め度くは思へども。契約なればサア。搦めよと手を廻すを高手小手に搦み付け大音上げて。詞天魔波旬と呼ばれたる曾我の五郎時致を。御所の五郎丸が生捕つたり下り合へやつと呼ばはり。地薄衣取れば童なり。こは如何に早まつて搦められし口惜しやと。齒ぎりをなし地踏鞴ふみ。鏡のやうなる兩眼にスエテ涙を。流すぞ哀れなる。地すかさず大勢下り重なり。千筋の繩を四方へ取りオクリ引つ立てへ行くこそ無念なれ。地かくとは知らで京瀬川の龜菊。曾我の五郎に契約あり組み留めんと顔隱し。繩を搔い込み此處彼處を目を

配つて尋ねける。虎少將も兄弟は。未だ討たれ給ふまじ此の騷ぎの其の内に。ちらとなりとも顔を見て冥途の契を結ばんと同じ所を行き返り立ち舞ふ揚羽の直垂は。宵に見たりし時致なり餘さじと飛びかゝり。同喜瀬川の龜菊ぞや時致やらぬとしかと組む。地組まれて少將振り放さん。振り放さんと悶ゆれども龜菊は放さじと。捻ぢ合ふ處を虎御前兩方へ押し分くる。顔を見れば少將なり。龜菊あつと驚きて スエフシ暫し呆れて言葉なし。地やゝあつて虎少將。つれないぞや龜菊殿昨日今日迄かう三人は。兄弟よりも底意なく明かし合ひたる其の中に。時致遣らぬ通さぬ女の際にあんあんまりな。さうしたものではないぞやとフシ言ひ捨て。行くを引止め。御恩を受けし。地皆様の殿御とある御兄弟に。そもや如才を致さうものか。宵にはや御兄弟の危き處を助け參らせ。今宵の御本意遂け難かりしを。妾が心の働き故。扨自らに組み留めよとの御契約候と。宵の次第をあらましに語るも聞くも忙がはしく。サア此の上は此處の勝手を案内し。御兄弟に今生にて今一度逢はせてたべ。はや今の間もお命知れずばや尋ねんといふ處に。夜廻りの本田の次郎馬上ながら大音あげ。同曾我の十郎祐成は仁田の四郎討ち留められ。弟の五郎時致は御所の五郎丸が組み留めてはや事治まりぬ。御所の假屋は安全たり靜まり候へ靜まれと。地館々をふれ廻る人々はつと耳に立て。あれ聞き給へと魂もスエテ消ゆるばかりに身に應へ。若しや〳〵の樂みの。心の綱も切れ果てだるか情なや悲しやな。同じ道にと走り出で。駈け出で〳〵歎かるゝは目もあて。られぬ許りなり。地龜菊やう〳〵慰めて。すかし勇むる言葉の露共に消えては誰人か。永き來世を弔はん此の世ばかりは短か夜の。空あけくれに星消えて澤の蛍や鳴く蛙。昨日の聲にかはらねど ハルフシ今の哀れを。忍びねに弔ひかはす八聲の鳥。寺々の。鐘の響まで又待宵にいつ聞かん。これや限りのきぬ〴〵ならんと泣く〳〵。連れてぞ歸りける。

第四

右大將頼朝卿。曾我兄弟が有樣甚だ感じ思召し。時致が死罪を宥めまほしく思せしかども。國法默止がたくして明くる廿九日に誅せらる。扨又仁田の四郎には高名三度の御契約とて。松島月毛に金覆輪の鞍置かせ。五色の厚總馬鎧新開の荒四郎。御使を承りオタリ仁田がへ假屋へ引かせける。地こゝに朝比奈の三郎義秀此の處を通り合せ。同ヤア新開殿見申せば君御祕藏の名馬を引かせどれへかと言ひければ。扨は御身は御存じないと見えた。是は仁田の四郎忠常拜領なりと答ふ。ム、珍しや此の馬は。生食磨墨にも勝つたりとて秩父北條我等が親爺。皆々願ひ申せしかど下されぬ御祕藏を。仁田の四郎に賜はるとはヲヽ合點々々。値段がよさに賣らせらるゝの。ハテ惡口を申さ

るゝものかな。仁田は富士の人穴へ入り此の度又蒲代の猪を乘留め。其の上曾我の十郎を討留め高名三度に及びし故。御契約にて拜領といはせも果てず朝比奈からからと笑ひイヤハヤしやらくさい腹筋千萬。三度や五度の高名を珍しいとは心得ず。高名づくにて貰ふならば。保元平治より源平の合戰迄。高名あるもの數を知らず。此の朝比奈もお耳に立つたる働き覺えあらん。地高名の數次第にて貰はるゝ御馬仁田迄遣らせうか。此の朝比奈が拜領申した不祥ながら新開殿。御取合せよきやうに申すとねちかけける。地新開ほうど持て扱ひ。いやなう所望ならば御前にて。直に訴訟召されよ某はお使なれば罷り通ると行かんとす。どつこいこりや先づ待て。國扨はしかとなるまいな。總じて此の朝比奈は惡い癖にて。或は敵の首でも城でも欲しいと念をかけ取らで置いたる例なし。是非に及ばず山賊して盜み申さう。地定めて後日に盜人とて切腹仰せ付けられん。馬と朝比奈とは頼朝こそ換へ損なれ。サア盜んだ渡せといへば。國イヤ其の方は男を見違へたるか。地新開なるぞ盜んで見よと手ぐすねひいて氣色する。國朝比奈くつ〳〵〳〵と吹き出し。イヤちつとも見違へはせぬ。曾我兄弟に出合ひ小柴垣を押破り。高這ひして逃げたる新開しつかと見知つた。サア地今こそ馬を盜むぞ止めて見よと。取つて突き退け馬取り中間蹴倒し。蹴倒し手綱かいくりひらりと乘る。主從やらじと寄る處を馬引返し八方へ踏み散し乘り散し。鞭打ちくれて角を入れフシ雲を霞に飛ばせける。地新開は力なく。童子の手を切つたる如く恨めしさうに打眺め。待て己れ覺えて居れ。今に思ひ知らせんと御所の。假屋へ 三重

虎少將道行

戀といふ戀といふ。フシ文字の字形を。判じもの詞しがらむ唐絲の。解くに解かれぬフシした心。いとほしや虎少將。母の歎きを諫めかね慰めかねつ詮方も。スエテ涙のうちに思ひ付き。フシ少し力を越後なる。禪師の君に告げばやと。フシオクリ旅立ち姿。此の儘は人や見知ると。さしかざす扇商人團扇賣。昔しのぶの戀風を。餘所に吹かせてやつし行く。世の習はしこそフシはかなけれ。人はともいへ我が身には三國一の殿持つて。富士さへ次に見し山の。今は上なき。雲の峯。月を招きし扇にも。見しは歸らで佛の。猶なつかしみ御影堂。ヲテ綺殿の扇召すまいか。夏を忘れて涼しさは。秋と白地や淺黃地やさつと限どる一筆鳥。何を恨みにあだし世を。景地墨繪彩色いろ〳〵に情の種を蒔き砂子すかし扇に唐扇。扇召せ〳〵。召されよや。扇とは區空事や逢はでぞ戀はそふ物をあはで戀ます。フシ鏡團扇や奈良團扇。扨繪團扇の品々は。オクリ武者繪や猛き武士も。心和らぐお山繪や浮世。男繪。立髪にしやんと振よき。お兒若衆の深編笠で。歌長い刀は。からで差す

真方。なるまいからが無いきそいの。茶つ筌やつこの。フシ踊り團扇に花盡し。スエテ所まだらに塗團扇。うらやましきは高砂の夫婦。妹背の共白髪。なぜに御身と自らは。薄きえにしの箔團扇。風を商ふ其の身さへ空の翼さは凌がれぬ籠の石原。日にやけて蝶も翼を。休め兼ね。千鳥鵠鴒。趾冷す。ギンオクリ清水が。もとの柳陰かげを。しるべに。ハツア走り寄り。立ち休らへばさあ。さつさ夕立つ雨かとて。フシ聲に笠きる夏の蟬。春秋知らぬ。仇し世を餘所に聞きしも身の上と。スエテこれも。涙を添へぬべしフシ聲はぬ旅のうき泊り。夢さへうすく間遠なる。蚊帳の釣り手の短か夜をハツミ來ては水鶏のほと。くくくと。ハルフシ格子叩くに。聞きまがひ思ひまがひつつ見まがひて。フシ雲間に騒ぐ稻妻と。行方も知らぬ思ひぞや。身はならはしの假寢にも。あひ馴れし夜の癖悪く。一人寢られぬ露の床。寄れ枕と引寄せて。フシハルしめても抱きても。恨みても。スエテ言ひがひもなき草枕。ナゲブシ投げそ枕に。とがもなやナホスいざとて。共に寄り添へど。女同志のあだ臥しは。歌二人寢ながら。下紐のナホス解けぬ心や。フシ氷室守。夏の氷もあればある團雪の。扇雪なれど。消えても殘る世の中にア、如何なれば我々は。戀のせごしを幾瀬とも越えしかひなき七瀬川。四十八箇瀬打過ぎて。越の白山白雪の。ハルフシ積るは富士に。似たれども裾野の原に我が思ふ魂の在りかは。嵐吹く松枝の里くれ行けば暫く。休らひ三重へ給ひける。

フシ日も暮れ行けば。地人々は宿を借らんと立寄り給へば亭主立出で。詞今夜は曾我一類の囚人此の處の泊り故。地外の旅人は一人も宿を貸す事叶はぬといふ。地こは如何にと肝を消し。曾我一類の囚人とは誰なるらんと問ひ給へば。詞五郎十郎が弟越後の國陸上の寺。禪師坊といふ法師を海野の太郎殿の承りにて。地召取つてお通りと。いふ中にはや牢輿の前後嚴しく取り圍み。家人先を打拂ひ。海野太郎は押へを乘つて弓に矢つがひ長刀の鞘外し。朝敵が謀叛人の生捕なんどの如くにて。驛路の中へ舁き入れしはオクリ見る目もへあはれにあさましし。地なう見給ふか少將樣。こは如何に虎樣なうせめて御兄弟の移者にも。又は母御の御慰のたよりにもと心ざし。遙々下るかひもなく。はや召捕られ給ひては亡き人の御形見。誰人にか渡すべき。お二人の御最期にも一足違うて逢ひもせず。忘れ形見に禪師樣を見んと思ひて遙々と。來たるかひなき旅衣。左衽なる世の中やと フシ歎くも。心便りなし。地此の上は片時も早く曾我に歸り。母御樣に此の由を一先づ知らせ申さんと。今來し道を立歸る心の。中こそ三重へわびしけれ。地右大將頼朝公は曾我一類の落着富士野にて御沙汰あるべしと。未だ假屋に御逗留かゝつし所へ。海野小太郎禪師坊を召捕つて御前に引つ据ゆる。君御覽じて和法

師は河津の三郎が末子よな。兄どもが敵討ちしを知つつるか。但し知らざりつるかとの御諚禪師居丈高になり。是は大將軍の仰とも覺えぬものかな。一腹一種兄どもが。親の敵を討つと申すに知らぬ顏する人間や候べき。但し法師なれば知つても得討つまじきやつと御覽ぜられて候か 一寸の蟲に五分の魂。かくと知らする程ならば祐經を兄どもに押向け。愚僧は御座近く推參致し。祖父伊東入道が御恨みをも申すべかつしものを。殘念や本意なやと フシ憚る氣色は無かりけり。 頼朝猶も志を引き見んとや思しけん。ヲヽ尤なりさりながら。汝はさせる科なければ伊東が所領を與ふべきが。還俗して頼朝に奉公してんやとのたまへば。禪師眼をくわつといらゝけ。 ヱヽよつく某を腰拔けと御覽ぜしよな。これ。兄どもは誅せられ。愚僧は三衣に繩をかけられ其の無念をも顧ず。所領がほしい命が惜しいと思ひ還俗を致さんや。 よし又仰に從ふども。明け暮れ君を見る度に恨めしや先祖の仇。恨めしや兄どもが敵と思ひ積つて何處ぞでは。御首ほしく成り申さば粗忽致さんは必定。然らば虎の子を飼ひ置き給ふに似たるべし。よつく御思案候へと猶憚らぬ言葉の末。君を始め奉り御前伺候の諸大名。あつばれ河津が子なりしと フシ舌を捲かぬはなかりけり。 暫くあつて仰せけるは。誠に猛き勇士どもかな。彼等兄弟召使はゞ。頼朝が一方の用にも立たんず者なれども力なし此の上は。時致を誅せし所へ引出し。首を打てと宣ふ所へ老母二の宮虎少將。暫固も番も怖ばこそ外垣を押し通り。御白洲の內垣に犇々と縋り付き。やれ母こそ來れ禪師坊。あさましの有樣なう我が君も聞召せ。老中達も聞き給へ。されば出家は佛子。とて衣を墨に染むるより。釋迦如來の御子となり。此の世の父母兄弟とは。他人に成つたる彼の法師にスエテ何の科の候ぞや。武士の子孫が敵をば。討つたが無理か フシ誤りか。時致が斬られしさへ御恨みに思ひしに。遠國波濤の隅々迄左程に搜し曾我一家を。絕さで叶はぬ事なるか。あの子ばかりは助けてたべなう御慈悲なるは人々よ。申し直して給はれやと フシ垣に。縋りて伏し轉び消え入り。絕え入り泣き給ふ。 今迄勇む禪師坊。母の歎きを一目見て朝日に消ゆる初霜のたゞしを〳〵と心くれスエテ前後も分かぬ。其の風情。 君を始め參らせて。滿座の諸武士下々迄。 フシ袖を絞らぬ者はなし。

三　部　經

禪師涙を押止め。ア、愚かなり母上樣。病に犯され劍に伏し火に入り水に溺るゝも。スエテ皆これ定まる前世の業。 フシ遁るゝ道のあるべくは。 世尊入滅あるべきや。十神力をあらはせば一日も百千歲。 迷の衆生は以如半日。 飽かず惜しと思ひなば千歲も夢の心ぞや。母上も姉上も禪師坊が最期に。 自受用卽身成佛の御法を說くぞ聽聞あ

れ。御前伺候の人々も。スエテ鳴を靜めて聞き給へ。地それ世尊一代五千七千の經卷は。華厳寂滅道場に始まり。法華涅槃に説き終る。其の中間の五時八教。中にも薩達磨芬陀利花。妙法蓮華と飜じたり。三世の諸佛出世の本懐。衆生成佛の直路超八菩提の鷲の峯。スエテ上なき御法と説かれたり。地爰に暫く縁なき衆生を度せんがため。方便の門を構へ。妙法蓮華の五字を隱し。南無阿彌陀佛の六字に攝す。五戒十善の窓の前には顚倒の霧。立昇り坐禪の床には。ギン煩悩の眠深く。修行天地に到り難き愚痴の凡夫は。地六字を稱じて極樂に往生す。婆婆分段の凡身には。恩あり仇あり貧福あり。善惡上下の品々も冥途の道に入りぬれば。利も首陀も。フシ かはらざりけり。己身の彌陀。唯心の淨土なれば本來無東西。何處有南北と觀ずべし。提婆達多は前生にて フシ佛の師匠。たりし身が阿鼻に。墮して苦を受くる。不輕菩薩は打擲せられ憎まれながら妙覺の。佛の位に到り給ふ皆これ。一念信解の德。それ六字の名號は。華厳經にて南の字をあらはし阿含經にて無の字を攝し。方等經にて阿の字を開き大般若にて彌の字をつゞめ。法華經を以て陀の字を皆會し南無阿彌陀佛と申すなり。妙樂大師の御釋に諸經所讃多在彌陀。緣深厚故と述べ給ふも深き心や。ありあけの。一心三觀の胸の月は圓頓止觀の雲にかゝり。フシ隨緣眞如の。初潮は同一鹹味の岸に打つ。中道實相の車は。無二無三の門に轟き。一乘菩提の駒は。平等大會の園に嘶ふ。等覺眞意の時鳥は フシ妙覺究竟の峯に鳴き。二乘作佛の鷲は。無作三身の谷に囀り。諸行無常の春の花は。是生滅法の嵐に散り。生滅滅已の秋の時雨は寂滅爲樂の紅葉を染む。一子出家の功力によつて妙莊嚴の悟を得。韋提希夫人の無生忍にあやかり給へ母上樣。禪師が素懷これにあり思ふ事も言ふ事も。これ迄なり人々いざ。我が首を召されよと フシ目をふさ。いでぞ居たりける。地賴朝重ねて學問といひ武勇の法師。近頃惜しき者なれども力なし此の上は。罪な作らせそはや〳〵討つて捨てよとある。處へ仁田の四郎忠常。言上の事ありと實戸を開かせ伺候する。虎少將も母上も忠常といふ聲を聞き。あれこそ祐成を討つたる敵人こそ多きにあの者が。討つたるか恨めしや面憎や腹立ちや。扨口惜しや喰ひ殺して退けたやとスエテ齒がみをなして。歎かるゝ。地忠常御前に向ひ。詞曾我の十郎を討留め高名三度に及び候。地御契約の御馬賜らんと申し上ぐれば君聞召し。それは沙汰にも聞きつらん。新開を使にて汝が方へ引かせし所に。朝比奈が狼藉にて盜み取り行方知れず。それ故義盛を始め三浦一黨閉門させ。新開迄も出仕を止めしと宣へば。仁田大きに不興し。詞これは御諚とも覺えぬものかな。三度の手柄せよそれ迄は。賴朝が預りしとの上意にて候はずや。御預りの我等が

馬を盗まれしなんどとは恐れながら上意とも存ぜず。御馬を得んばかりにこそ一命にかけ祐成を討留めて候へば。地是非に於て後ともいはず。ッシ今たま。はらんとねだれける。地垣の外なる母上憎き奴が言葉やなたとへば龍馬千萬匹にもせよ。人の大事の秘藏子を。馬にかへて討つたるとは人でなしの畜生めとッシ擘を上げてぞ泣き給ふ。地頼朝もあぐませ給ひやあ忠常。其の儀ならば何にても他の物を望めとある。仁田暫くあたりを見廻し。詞然らば御馬の代りに此の。禪師坊を賜はらんと申す。いや〳〵彼は大事の囚人なれば叶ふまじ。其の他は頼朝が重代髭切膝丸にても望めと宣へども。仁田かぶりを振つてイヤ〳〵馬は四足有る物なるに。足も手もなき膝丸髭切は否にて候。地是非禪師坊を賜るか。さなくば御契約申したる松島月毛を賜るか。二つに一つの御諚を承らぬ其の内は。全く此處を立ち申さじとッシどうど。座を組み居たりけり。地頼朝ほうどあぐませ給ひ。此の上は詮方なし。然らば禪師坊を取らするとの御詞も收まらぬに。こは有難しと罷り立ち繩切りほどき塵打拂ひ。詞これ〳〵曾我兄弟の母御疾う〳〵連れて歸られよ。地こは誠か夢なるか神か佛か仁田殿。生々世々の御慈悲なるはと忠常を拜むやら。禪師坊を擦るやら行きつ。戻りつ泣いつ笑うつ嬉しさ足も地に付かず。暫しどよめき。悅びしッシ心ぞ思ひやられたる。地斯かる折節朝比奈の三郎。松島月毛の口を取り御白洲に馳せ參じ。詞義秀めは盗を仕り直に立退き候へども。思案を仕り我と我が身を訴人寵り出で候。盗んだ處は科なれども自身訴人の御褒美には此の馬朝比奈が。地拜領致し申すべし若し。御聞入れなくば訴人して盗もなし。いつぞ元の盗人になり和田の一門九十三騎。三浦の一黨同類とし盗を致す程ならば恐らく鎌倉中東八ヶ國を盗み立て。後には何を盗まうやら知れ申さず。時には君の御損たらん理を枉げて義秀に。拜領仰付けられかしとッシ恐れながこを申しけれ。地頼朝笑爾と笑はせ給ひ。朝比奈が我が儘今に始めぬ事ながら。是は餘り興がつたり。さり乍ら和田が一家に免じて取らするなりと仰せける。朝比奈頭を地につけ。有難し〳〵と御禮を申しもあへず。詞こりや仁田。お主は近頃出來いたり。あの禪師坊が命は日本國が御訴訟しても中々叶はぬ處。まつ斯うせうと思ひ扨此の馬を盗んだり。地此の朝比奈と同腹中。サア則ち某が引出物に和殿に遣るこれで何處も丸うなつた。名は朝比奈と名乘れども智慧は深いな分別よしひで。褒めてくれよとどつと笑へば我が君伺候の人々もッシ興に入つてぞ感ぜらる。地かくて大將簾中に入り給へば。海野太郎行氏役所より驅け來り。詞コレ〳〵朝比奈。御邊の仕方仁田は悅び申されうが此の海野はさら〳〵立たず。御邊が馬を盗みし故。我が召取つたる禪師坊を忠常に助け

させ。殊に諍ある馬を仁田に遣るは何事ぞや。それでは某一分立たず。白癩聞えぬ仕業といへば義秀えせ笑ひ。イヤ事をかしい一分だて。自體あの馬御邊如きのへろ〳〵武士には似合ず。其の上手柄三度したる者にこそ賜らんとの御事なれ。地ろくな手柄を一度もせいで此の馬を望む事。經をも讀まで布施取るに似たり。今でも手柄にサア。此の朝比奈を投げて見よと。大手を擴げかゝりければ我が儘者の無法やぶり構うていらぬものなりと。ぶつくさ〳〵呟き表をさして逃げければ。　仁田朝比奈どつと笑ひ。これ迄なり曾我の人々はやお歸りとすゝむれば。朝比奈殿のお志仁田殿のお情。草の蔭なる兄弟も嘸や悦び申すべし。あはれ存らへ在るならば如何は嬉しかりなんとなは繰言の悔みぐさ。むかし戀ひぐさ葱葺く伏屋に誘ひ歸らるゝ實にや樂しみ悲しみの定めがたなき人界なりとは今こそ。思ひ知られたれ。

第五

かくて頼朝公富士の御狩ましく〳〵て。はや鎌倉に還御あれば大名小名相殘らず。御機嫌如何と御伺のためノ皆々出仕申さるゝ。地我が君仰せ出さるゝは。　此の度の卷狩遊興といひながら。且は耕作を荒す獸を退治せし事。萬民の助け小を割して大を救ふの道理なり。詞それにつき過ぎし夜不思議なる夢を見る。曾我兄弟と覺え衣冠正しくして曰く。此の度我々父の敵を討ちし事。閻王孝の道を感じ。祖父伊東の入道河津の三郎共に修羅の苦患を免れ。忽ち兜率の內院に生を受くる。地然れば仇をば恩にて報ずる習ひ。我々兄弟富士野に居して永く弓矢の道を守るべしと。いふかと思へば其の姿正銘荒神と現れしと。思へば夢は醒めてげり。誠に古き言葉にも。父は至つて親しからざれども至つて貴く。　母は至つて貴からざれども至つて親しく。父のみ貴く親の義に兼ねたりといふ本文あり。斯くは知れども親のため命を捨つる者やゝ稀なり。殊に閻王孝の德を感じ。祖父親の罪業迄免るゝとの夢の告。夢とは更に思ほえず前代未聞の事どもなり。後代迄の武士の鑑打捨て置かんは本意ならず。急ぎ富士野に社を立て弓矢神と齋ひ扨又子孫には伊東が家督を與へん間。一家殘らず急ぎ召せと宣へば。伺候の人々一同にこは有難き上意の趣。感するに詞なしとフシ皆謹んで申さるゝ。地時を移さず召に從ひ老母を始め禪師坊。二の宮の姉虎少將鬼王兄弟父津藏の入道迄。祐成が一子を先に立てオクリやがて御前に上らるゝ。地頼朝御覽じ長々の日蔭の身。さぞと察しやられたり。さり乍ら其の恨みを飜へせ。子孫を取立て得せしむべし。先づ伊東が三萬町の所領祐成が一子に取らすべし。禪師坊は陸上の後住。虎少將は老尼諸共跡目の一子を守り立つべし。跡に控へしは定めて鬼王團三郎とやらんな。其の他に老入道。あれは富士野にて海野が捕へ來り

し。辨慶が父田邊の別當辨眞にてはなきか。時に仁田の四郎罷り出で。詞如何にも辨眞と名乘つては候へども誠は斯樣々々の次第なりと始終の段々相述べ。主を重んじ辨眞と僞り申し候由。あつぱれ忠信深き者どもにて候と申し上ぐれは。地扨々驚き入つた仕業かな。詞して又入道は曾我が家に傳はりし者か。さん候生國は尾州熱田の宮の社人にて候ひしが。社領の爭にて所を立退き。其の後河津の三郎に抱へられ。二人の悴諸共に曾我兄弟に召仕へて候。地君暫く感じさせ給ひ。扨も〳〵神妙なる親子かな。世に亡き主を見捨てもせず。數年の奉公さぞや物憂く思ひつらん。さりながら左樣の先途をみつけばこそ。今又共に世に出づれ。猶々跡目の家臣となり恙なく勤むべし。詞扨入道はもと熱田の社人とあれば。地幸ひかな曾我兄弟を富士の裾野にて。正銘荒神と齋ふなれば神主職を勤むべしと。則ち宮内卿と召され鬼王は津藏の主膳。團三郎は同じく大膳と官職を賜れば。こは有難し〳〵草の蔭なる兄弟も。嘸や悅び申さんと。フシ涙を流し禮儀ある。地はやお暇賜ればと。勇みに勇み歸らるゝ威勢の。程こそ。三重入ゆゝしけれ。フシ夜を日についで。地裾野の社程なく造立ありければ。吉日を選ばせられ我が君御參詣ましませば。大名小名お供の儀式。フシ晴れがましさは限りなし。地曾我の一家も相殘らず皆々社參申さるゝ。添くも我が君は。社壇に向はせ給ひ御手を合させ給ふにぞ。近習外樣の人々迄スエテ皆々法施を捧げらる。地扨假御殿に入らせ給ひ御簾を捲かせましませば。禰宜覡座に着いて太鼓銅鈸子笛鼓。八乙女鈴を振り立てて既に神樂を。三重入參らする。フシ種々の供物。地瓶子かき据ゑ渴仰申させ給ひければ津藏の宮内白髮たる老鬢に。風折烏帽子を着し雲紋の直衣に白き指貫幣帛携へ畏り。いで〳〵祝詞を申さんと。老音張り上げ恭しく。謹上再拜敬つて白す。謡神司。八人の八少女五人の神樂男。雪の袖をかへし。白ゆふ花を捧げつゝ。神慮をすゞしめ奉る。御神託に任せて。猶も神忠を致さん。有難や。抑神慮をすゞしむる事。和歌よりもよろしきはなし。其の中にも神樂を奏し乙女の袖。かへすぐも面しろやな。剛し廊の舞の袖。今更思ひ出でられし。虎少將が連れ舞にて君を慰め參らせよや。はやとく〳〵といふしでのフシ神は。上らせ給ひけり。地神託といひ殊に又。家引き起す曾我菊の花の一本安穩に守り給へと虎少將衣紋繕ひ立出でて。二人連れ立つ舞の曲昔に。かはらぬ。三重入常磐木の色も一入。いやまして千代に八千代をふる川の。地口君は舟とよ臣は水。謡水よく船を浮ぶれば。四海の波も治まりて梢。ゆるがぬフシ時なれば。幾年咲かぬ曾我菊も。一味の雨の潤ひに枝葉榮えて咲き出づる。君の惠みぞ有難き。神も感應。し給へや。名にし負うたる此の野邊に。フシ光を飾る宮造り朱

の玉垣。御注連縄猶永かれと祈るなる。御代の鏡のかけ清らかに。みがけやみがけ人心富士の高嶺の。白雪も。とくれば同じ谷川の。流れの末は鹽つ海。實相眞如の浪となり。ギンハルフシめぐる月日を。松原の緑の色を三穂が崎。オクリ汐汲む。蜑の打連れて持つや。田子の浦あづまからけの。汐衣。汲めばぞ月は桶にある。○あれなう。月は一つ△かけは口二つみつ汐に ハルフシうつせばいよしも清見潟。さやけき空もいつの間に。時雨るゝ雲の愛鷹山。降らば降れ〳〵雨は。降るとも。イヤ閣とても。道くらからぬ星月夜。ギンオクリ治まり靡く民草の。榮えは千々の秋なれど誰か刈るべき鎌倉山 冷泉春は。先づ咲く。梅が谷。夏は涼しき扇が谷。秋は露草。笹目が谷冬は降り積む雪の下鶯が谷より。見渡せば由井の。濱風そよ〳〵吹けば舟に帆かくる。稻村が崎。いひしまべの島つゞき。歌にも詩にも言葉にも。フシ筆も捨つべき江の島や。フシ岩に碎くる白波とつれて鳴がばつと立ち。△さつと引く汐磯邊の千鳥。ちんりちり〳〵と。友鳴く聲との口島蔭より櫓の音が。かちりころり。〳〵と歌漕ぎ行く舟もよなもさ君が。招けばちとちゝと。ちと〳〵たんと打寄する波の鼓。海濱樂に△青海波○はら〳〵△ほろ〳〵○どうど打つ口それは磯波これは又諫鼓苦しむ鳥驚かぬ東天光の時つ風枝を。鳴らさぬ三重〱御代とかや。フシかかる所に。地俄に黑雲舞ひさがり雷火亂れ雲中より。さも凄じき聲を上げ。此の富士野に棲む事九百年。千年滿つれば畜生の業を遁れて善處に到るを。此の度仁田に害せられ本の三途に立歸る。恨みは盡きじといふ下より惡鬼の像を現して虛空に上り地に下り。樣々障碍をなしけるは凄じかりける 三重〱次第なり地君を始め奉り各々怪顕し給ふ所に。不思議や社壇の内と聞え弓の弦音頻りにして。いづくよりとは白羽の矢雨の如くに射かけつゝ惡鬼が上に降りかゝるさしもの怨靈堪まられず。種々に變化し逃げ廻る。神力加護とぞ 三重〱見えにける。フシ神變自在の。地矢先にて終に怨靈滅し社の戸帳押し開き曾我兄弟現れ出て君を誓く拜しつゝ。忽ち正銘荒神と現れ虛空を指して上らるゝ我が君いよ〳〵信仰あり。今に絶えせぬ弓矢神現人神とは此の事なり。なほ〳〵天下泰平源氏の御代萬々歲目出度しともなか〳〵申すばかりはなかりけり。

右此本者依小子之懇望附祕密
音節自遂校合令開版者也

加賀掾
字治澄好 (畫刊)

二條通寺町西へ入町
山本九兵衛刊 印